

## 退職に当って

大里 浩秋

この度、長くお世話になった神奈川県立神奈川大学を去ることになった。二八年間大過なく、と言いたいところだが、いろいろ周囲に迷惑をかけたつどうやらここまで来ることができたのは、教職員各位のお力添えのおかげである。

学生の頃は中国文学を専攻したが、その後関心が歴史に移り、授業では主に中国近現代史と日中関係史を担当した。そして心がけてきたのは、中国の近代以降の歴史およびそれと日本の歴史との関係を、誤りなく学生に伝えることであった。そのために、理解の基礎となる資料を集めて丁寧読み込む作業を自らに課してきたつもりである。どこまで徹底できたかは心もとないが。また、自分の研究が人を驚かすほどに立派な内容でないことを重々承知しているので、乏しい関心や知識を動員し、かつ中国問題の優れた理解者の助けを得て、講演会やシンポジウムを開くことを心がけた。ふり返って、悔いなしとすべきか。

今回退職に当って、中国語学科の同僚孫安石さんの尽力で本誌に特集を組み、それを、同僚の諸論考と中国の二人の友人のメッセージ、さらに中国人日本留学史研究会の若い仲間である川崎真美さんの作成になる私の「業績」一覽で構成していただくことを知り、感激している次第である。

人文学会と本誌が私にとってありがたい存在だったことは、「人文学会六十周年に想うこと」に書いた（本誌一八二号）。人文学会と人文学研究所の活動が今後ますます活発になり、本誌と『人文学研究所報』の存在が学内外にますます注目されるものとなるよう祈っている。

最後に、お世話になった皆さんに感謝し、神奈川大学のますますの発展をお祈りします。